
睡蓮

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

睡蓮

【Zコード】

N5170E

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

地球が涙を流して。月が消えて。太陽が落ちてきても。

C a 1 1 m y n a m e 1

いつもこの空を見上げていた。

いつか私を解放してくれる誰かが現れるって。

私が見える人間はごく限られてるって言ひ。

そう遙か昔私を造った古代日本人が言っていた事を思い出す。

多分お前を見る奴は赤ん坊みたいに純粋な心を持つてるんだろうな。

泥臭い欲望にまみれて。

その中で純粋さを保つのはとても難しい事なんだよ。

だけどそんな奴が此処まで来て。

お前を見つけて。

世界を救うって俺は信じてる。

そう言って。

私を造った古代日本人は息絶えた。

昔々その昔。

それこそイカロスが太陽の塔を目指したように。

古代日本人は黙々と私を造つて。

空の上に届くような塔を地球の中心に造つた。

その技術は今は誰も知らない。

私だけ遺された。

だから私は待ってる。

私を見つけてくれる誰かを。

Call my name 2

ICUコンピュータの中って意外と快適なんだよ。
私を造った古代日本人が言つてた。

暑くも寒くも無い空間で。

お前を見つけてくれる人が来る事を願うつて。

古代日本人は女の身で塔を造り。

いつか来る大災害の予兆を皆に訴えていたのに。

皆はバカにして聴かなかつた。

その報いだと自分だけ塔に登り助かればよかつたのに。
私を造り言つたんだ。

「いつかやり直したいと思つたときに手遅れだつたら悲しいじゃない？」

「一回ぐらいならきっと神様だつて許してくれる。」

彼女は誰にも知識も技術も教えないで死んだけど。
その分半永久的に生きる私を造つた。

ドウシテ？

そんな人間死ねばいいのに。

自業自得なのに後世に私を残す意味が何処にある？

色々聞きたかったのに。

きっと精根尽き果てて私を完成させ逝つてしまつた。

純粹な心を持つた人間なんているわけ無いのに。

だけど私は待ってる。

矛盾してるかも知れないけど。
赤ちゃんみたいな心の持ち主。
純粹で穢れなくて。

それこそ太陽みたいな。
太陽みたいな心の持ち主。

温かくて。
涙が出そう。

私を造った古代日本人は綺麗だったな。
綺麗な心の持ち主。
ガラスみたいに纖細な。
あなたを大好きだったよ。

髪が長くて。

黒い服を着て。

瞳が大きくて。

口ずさむ歌はチャイニーズ。

私に話しかけるのは英語か日本語。

一体あなたは何ヶ国語話せたのだろう?
あなたの背中を私は覚えてるよ。

「は〜。死ぬかと思つた。」

僕は装着していた羽根を取る。

この黒い羽根は太陽の熱を吸收するんだって。
だから白い羽根より燃える確率は少ないと親友の理科科学者が言つた。

それをバカにする奴は白い羽根と共に燃えてしまった。

燃える瞬間後悔する。

でも後悔は遅すぎて。

人間がバカな所為で。

異常気象は止まらなくなってしまった。

雨すら降らなくて。

灼熱に焼かれたコンクリートの建物は僕が蹴りを入れただけで砂になってしまった。

雨を待つ地上の人間は嵐を願つたけど。

台風すら起こらないぐらい地球は乾いてしまった。

河は乾涸びて。

海は塩が浮いてきちゃつた。

元々地球は悲鳴を上げていたんだ。

それは文明が出来上がった昔じゃなく。

つい最近のこと。

だつて狂つてるとしか言いようが無いでしょ？

僕が昔見た蒼い空は今でも変わらず蒼いけど。
雲ひとつ無い空が永遠と続く。

どうかしてるとしか言こみうが無いでしょ?
僕が住んでる日本じゃ布団を干す習慣があつて。
うちの親は呑氣だから。

布団も洗濯物も沢山干せて良いわねって。

悠長な事言つてたけど。

僕は危機感を覚えて。

気象のプロにならうと思つた。

風向きや前線。

そんなのが判ればどうにかなるだらうって思つてた。

そして気象庁の中核に入つてわかつた。
もうお手上げだつて事。

何で?

そんなの1番僕が知りたい。

お手上げだって誰が決めたの?

だけど判つてる事は。

僕たち人間が好き勝手やつてきたツケが回ってきたつて事。

人が増えたから建物を建てて。

ゴミが増えたから海を埋め立てて。

足がある魚が生まれても。

最初だけちょっと騒いで慣れていく。

食べ物が無いから人工授精させて。

挙句奇形が生まれたと騒ぐ。

そして気づいた気象のプロたち。

このままでは人間は破滅しか道はない。

僕はただ単に神さまが怒ってるんだと思うけどね？

それは本当に繰り返さないように謝るしかないと思うんだけど。

だから僕は志願したんだ。

昔からの言い伝え。

僕の住んでる日本では。

背中に装着する羽根が開発された。

それは中国大陸のど真ん中に。

昔イカロスが目指したと言われる太陽の塔があつて。

その塔を登り切れば。

異常気象を止める装置があると。

但し登り切った人間は1人もいなって。

気象のプロたちで結成されたチームは。
白い羽根で登るつもりだった。
でも太陽にあまりに近すぎて。
羽根だつて溶けちゃうんだ。

そう言われてたから。

土壇場になつて辞退する人が続出して。
だから僕は志願したんだ。
まだ大事な人に会つてないから。
会わないうちに。
尻込みする前に。
空を飛んでみたかった。

どうせ苦しむのなら。
力一杯生きたい。
そう思つた。

そして出来るなら地球が滅亡しなければいい。

僕の力はきっと小さくて。
だけど。
だけどね。

銀貨にだつて言つたけど。
僕は空を飛んでみたかったんだ。

もし神さまがまだ僕たちを許してくれる気があつて。
僕が其処へ辿り着けなかつたとしても。
誰かが僕の遺志を継いでくれるつて。
そう信じてるから。

もし僕が辿り着けたら。
神様に謝り倒して。
雨を降らせて貰うんだ。
謝るなんてかつこ悪いよと誰かが言つてたけど。
でも悪い時に謝るのつて当然でしょ?
勿論その代償はあると思つけど。
僕のようなちんけな人間の命で良いんなら。
それでも構わない。

呑氣なうちの両親は。

僕の決意を聞いて案外冷静にこう祈つた。

「神さま。どうかこの子をお守りください。」と。

「…睡蓮。本当に行くのか?」

派遣が決まった日。

親友の銀貨がこう言つた。

古来の日本では苗字といつものが在つたらしい。
だけど現在の日本では苗字といつものは存在しない。
佐藤とか鈴木とか田中とか。
そんなのは意味を成さなくなつた。
代わりに僕みたいに花の名前とかお金の名前とかが主流になつた。

銀貨がいるつて事は日本中探せば金貨だつて銅貨だつているはずで。
鈴蘭だつて薔薇だつているはずで。

銀貨は僕が気象庁に入庁した時に同期になつた。

年は銀貨が1個上で。

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。

美人な年子の姉ちゃんもいて。

姉ちゃんは雛菊だった。

そして言うんだ。

同じ気象庁だけど専門の違う僕に。

「黒い羽根で行け。」と。

白い羽根は燃えやすいから。と。

親友の理科科学者がそう言つうんなり。

反対する理由も無いし。

だから迷わず黒い羽根を選んだ。

「マジだよ。マジ。ちょっと行つて来るだけだから。

本当は怖くて泣きそうだつたから。

軽い口調で言つた。

燃えて死ぬなんて最悪って思うけど。

決心したんだから後ろは振り向かない。

「行けよ。」

銀貨は最後にこう言つた。

決めたのはお前だろ？

強い口調で。

黒い羽根を託して。

大空を飛んで。

あの塔のてつぺんを田指して。

「俺たちの分まで謝つて来い。」

銀貨が背中を押してくれた。

理想は御伽噺の勇者みたいに。
胸を張つて生きていく。

…僕ね。生きて還つてくるから。
だから神さま。やり直す術を教えて?
身勝手で我慢で本当にごめんなさい。

My decision 2

本当は一ヶ月ほど前。

銀貨と大喧嘩したんだ。

銀貨は僕の事が心配で一緒に塔に登ると言った。

僕は登つて欲しくなかつた。

だって命かけるのは僕一人で良い。

そう思つてたし更々一緒に行く気なんか無かつた。

銀貨の姉ちゃんだつて僕に言った。

「銀貨を連れて行かないで。」つて。

僕は笑つて。

笑つて言つた。

「そんなつもりは無いよ。」つて。

そんな風に思われるのは心外だつたし。

銀貨が一緒に登ると言つたから。

僕は全力で固辞しようと思つてた。

でも信じてくれなくて。

僕の事黒い悪魔だと言つたから。

黒い羽根をその時背中につけて実験してたから。

「雛菊。それは酷くない?」

思わずそう言つちやつた。

だつて。

だつて雛菊は言つんだ。

「だつて。あなた銀貨の事好きでしょ？」

恋愛感情で。

：僕は打ち抜かれた気がした。

「…それは雛菊の取り越し苦労だよ。」

僕はやつとの思いでそつ眩いた。

僕は自分の気持ちは恋愛感情じゃないと思つてゐ。そしてこれからも発展したいとは思つてない。

銀貨の事大好きだけだ。

最初から一緒に行つてもらおうなんて思つてもみなかつた。
「うちの大事な弟頼むから連れてかないでよお…。」

そう言つて。

雛菊は泣き崩れた。

：派遣が決まつて。

僕は胸を撫で下ろした。

体力審査で銀貨はひつかかつたから。

派遣が決まつて。

僕は尚更好きなものを作らぬでおりつと思つた。

雁字搦めの感情はどうこもならぬいけど

銀貨は僕にじつ言つた。

「お前さ。逃げてるだろ?..」

的を射てて。

「…逃げてるよ。」

嘘はつけなかつたけど。

でも僕は。

胸を張つて言つたんだ。

「大事なもの見つける前に派遣が決まって良かつたよ。」

本当は未練タラタラで。

だけど。だけどね。

心は痛いけど。

目の前の人だが。

死なないで済むように出来るかもしない。

それだけで僕は嬉しい。

本当に嬉しい。

滅亡の時代を生きてるけど。

この異常気象を止められるかもしないから。
もし僕が志半ばで倒れたらその時はようしくね?

口に出したら怒られそうなどを思つ。

その後聞いたんだけど雛菊と銀貨は僕の事でケンカしちゃつて。
僕がそれに口を挟んで。

また更にケンカは大きくなっちゃつて。

黒い羽根で行けと銀貨はケンカしても変わらずそれだけは言つてくれた。

だから余計に僕には思い入れがあるんだ。
この黒い羽根に。

太陽の塔に初めて地上から登つて来た人間は。

結構日に焼けて紅かつた。それは燃えなかつた証もあるけど。
黒い羽根を背中につけて。

宛ら世紀末を伝える黒天使みたいに。
魔女の使いの鴉みたいに。

髪も瞳も真つ黒で。

私はいよいよ迫つた世紀末の声を聴いた気がした。

私はICOコンピュータの中で息をひそめていた。
さぞかし外は暑いだろう。

私を造つた古代日本人が言つてた。

「きっとこの塔に着くのは日本人ただ一人だよ。」

あなたはそう言いながら。

古代日本語を其処に彫つてたね？

ただ一つのあなたと未来の誰かを繋ぐ伝言。
あなたが信じてこの塔に登つて來た人間は。
石碑の前でこう言った。

「日本語じやん？」

あなたの言つ通りになつたね？

「…」

僕のチームは9人編成だった。

カメラマンとチーフと。

気象予報士2人と。

僕みたいな立候補生5人。

その中で理科系は僕1人だった。

そして生き残ったのも黒い羽根を選んだのも。

僕1人だった。

皆燃えて燃えて燃えて。

僕もいつ自分の番が来るかと思ってた。
確信なんて無かつた。

見えない死神が刻一刻と迫ってきてるみたいに。

でも僕と皆と決定的に違う所は、

人の言う事に耳を傾けて。

忠告は取り敢えず聞き入れて。

他と違う事を恐れなかつた事。

僕だけ浮いてた事知つてたよ。

僕の黒い羽根を見てあいつ本氣か的視線送つてきてるのだって知つてる。

だけど大好きな理科科学者が僕を思つてそう言つんなら。

性能だつて何一つ違わなくて。

色だけが違うだけなら。

拒否する理由が無いじゃない?

白い羽根で飛んだ報いは僕を除く皆に跳ね返ってきた。

それは死を意味していた。

だから銀貨は必死で止めたのに。

結局最後の最後まで手遅れになるまで聞き入れなかつた。

まるで古くから伝わる御伽噺よろしく。

横並び日本人の典型的な考え方。

赤信号皆で渡れば怖くないってか？

僕はね。偉くもなんとも無いけれど。

横並びで人と一緒のことするのが昔から大嫌いだつた。

だけどね。目の前で燃えて死んでいく仲間を。

何としても助けたかつた。

本当に助けたかつた。

その人間は私の前へ立つて。

私の中枢とも言えるスクリーンを覗き込んだ。

「あちや～。これは英語？」

スクリーンには英語で映っていた。
とても難解で緻密で綿密で。

私を造った古代日本人のあなたが。
そんな私を見て苦笑いしたつけ？

人間の英知を一身に集めたようなあなたが。

私を造り。

自由自在に各地の言葉操るあなたが。

唯一苦手とした言語で。

私をプログラミングした。

私に話しかけるときは。

英語だつたり日本語だつたり。

歌を歌うときはチャイニーズだつたね。

そして石碑は古代日本語で彫つてたね。

「通じるかなあ？」

僕つて英語苦手なんだよね。

私のスクリーンを覗いて。

黒い羽根を外しながら。

登つて来た人間は小型の機械を出した。

それは多分ここ数十年の間に爆発的に普及した人間と人間を結ぶ通信機。

人間と人間を繋いで情報交換が出来る機械。

でも私の電波は弱くて。

見る間にシャットダウンした。

……。

……。

真つ暗闇の中で。

のんびりとした声が響く。

「ありや。シャットダウンしちゃった。」

古代日本人がよく言つてた。

私の唯一の弱点は地上波だつて。

「でも未来では電波は沢山だらうね？」と。

「ごめんね。ちゃんと復旧させるから。」

僕は砂煙になつたスクリーン相手に眩いでいた。

昔の文献に書いてあつた伝説。

ノアの箱舟みたいに数百年前。

僕たちが生まれるずっとずっと前。

女人人がたつた一人でこの太陽の塔を造つたんだつて。

中国大陸のど真ん中に。

バカにする人たちは口々にこう言つた。

「未来なんか考えなくても地球はそんなに脆くない。」と。

でもその人は夢を見たんだって。

俗に言ひビジョンつてやつ?

砂漠化した日本と。

ほぼ海に浸かってしまった中国大陸と。

でもその人の志は高く。

中国大陸のど真ん中に1人で来て。

万里の長城だつて月から見えるから。

そう言つてでっかい塔を建てた。

見よう見まねの左官の技術と。

たつた一つの道具を持って。

その人を神様は見捨てなかつた。

食べ物は鳥が運んできたし。

寝る時は同化できた。

そして異常気象を止める装置を発明したと言われてる。

今日は七夕だつて。

僕たちの日本では短冊に願いを書いて祈る。
たつた年に一度だけ。

思えば2週間前は編成チームの誰も死んでなかつた。
2週間前は地上に居たんだなつて改めて思う。

たどたどしい英語で理科科学者が説得に必死だつたつけ？

織姫と彦星は今日は必ず会えるね。

だつて雨が降らないから。

今年のエイプリルフールの日。

月が消えた。

突然何の前触れも無く。

忽然と月が消えた。

地球上の何処へ行つても月は見えない。
雨は降らない。

月が消えた。

そして太陽が何だか近くに見える気がする。
温暖化は激しくて。

北極の氷はもう溶けて無くなっちゃつた。

海面上昇は著しく。

僕の出身地雫町も地震の隆起で山肌の間に雫の形で取り残されてしまつた。

それでも空は高く。

雨は降らない。

太陽は近くに来ていて。

地球規模での平均気温は50度だつて。

僕はずっと心の中で祈つてゐる。

短冊に込めた願いは。

他の人とちょっと違つて。

皆幸せになれますように。

儂いけどやう願つた。

そして今でもそう願つてゐる。

僕の生き方はきっと間違つてるかもしれないけど。

大事なものを作らないように生きてきたけど。

僕が女だったら。

きっと銀貨に告白して傍について欲しかつただろくなつて思う。
滅亡の時代を歩んでいても。

自分だけよければきっと良かつただろうつと思つ。

僕がもし。

ここに異常気象を止められる装置を使いこなせたら。

もしかしたら地上の銀貨たちに未来を渡せるかもしれない。

そう思つたら自分の人生も悪くはなかつたつて思えるかな?

死ぬのは怖いよ?

だけど頑張つてみるから。

目の前の彼は復旧の赤いボタンを押した。

キュウイーーーン……

再作動は私を造った古代日本人でも難しかつたのに。いとも簡単に目の前の彼は私を再作動させた。

画面に映る彼の顔は真剣そのものだった。

私が電波に弱いから。

小型の通信機器は電源を切つてしまい。

だから私はスクリーンに英語を映してみた。

「What are you looking for?」

目の前の彼は。

それに気づいた表情で。

手元にあつたキーボードでこう呟いた。

「A gift」

ギフト。

それは贈り物の意。

私は思わずこう映した。

「Why do you say "A gift"?」「So I will do anything for the

EARTH

「YOU?????」

地球は大文字で。
じゃあ私見えるの?

「So could you see my vision?」

私が待っていたのは彼だったの?
私見えるの??

本当に???

「見えるよ。君でしょ?」

私のスクリーンに向けて。

彼は手を差し延べた。

多分母国語の日本語で。

あなたは言つてたね。

赤ん坊みたいな純粹な心の持ち主が私の姿を見るつて。

それも日本人だって。

そんなのいる訳無いつて否定していたけど。

こんなにも嬉しいのは何故?

嬉しくて嬉しくて。

私は彼の手をとった。

温かい彼の手は。

生きている証。

無事に塔を登りきつた証だった。

「「めんね。驚かせちゃって。」

僕は内心びっくりしながらスクリーンに手を出した。

半透明な人がスクリーンから現れて。

ホントびっくりしちゃった。

日本語ではダメのかなって思いながらさつきから画面に打つていた。

英語も高度になると僕には使いこなせないから。

画面を見て僕でも判り得る英語だったから思わず打った。

僕は淋しかったのかもしれない。

仲間は燃えて死んでしまって。

地上の銀貨とは連絡を取れなくて。

沈黙がイヤだつたから。

僕は日本語で話しかけた。

「雨を降らせて欲しいんだ。」

唐突だつたけど何か言わなくちゃつて思つて。

僕がここに登つて來た経緯だとか。

悪意は無い事だとか。

だけど1番言いたかったのは。

「雨がね。全然降らないんだ。」

「人間が愚かな所為でね。もうずっと前から判つてたはずなのに。」

その女の人は黙つて僕を見上げた。
そして制して。

僕の額に手を触れた。

何ともいえない感情が次から次へと溢れて。
涙が溢れた。

もう手遅れなの？

このコンピュータも使えないかも。
絶望の鐘が鳴り響いてる。
もう終わりかもしねない。

君の手は半透明なのに生きてるかのように温かかった。

「It's over」

君の口がそう開いたように見えた。
ごめん。僕じゃ無理だつたみたいだ。
力が萎える。
僕は座り込んで。笑うしかなかつた。

「ハハハ…。」

走馬灯のように僕の頭の中で色んな事がフラッシュバックした。

ごめんね。銀貨。

ごめんね。雛菊。

ごめんね。先輩。

手を繋いでよく判る。

君の思つてること。

私は君の体温から感じじる。

君の生きてきた足跡を。

君は両親に愛された子供だつたんだね。

涙を堪えきれず涙を流した君のためにきつと。

私は造られたんだ。

「まだ。まだ終わりじゃないよ。」

まだ私を造った古代日本人の思いは遂げられてない。

古代日本人は死に際に私に言った。

「君が見える人間がこの塔を登つて現れたら。

「どうか助けてあげて。」

「バカな人間たちにあと一回だけやり直すチャンスをあげて?」

「君に思いを託すから。」

過去に思いを馳せて私は思わず古代日本人の名前を呼んだ。

「睡蓮。」

。。

「…僕の事?」

僕は涙でぐしゃぐしゃの顔で半透明の君を見た。

「君は睡蓮って言つの?」

睡蓮。それは僕の名前。

苗字がなくなった日本で。

純粋に生きられるように両親が付けた。

君は頷いて。

「もう一回だけやり直しなさいって私を造った睡蓮が言つたんだ。」

僕は驚いて。

手を引かれた。

「ここが私の中枢。メインコンピュータ。」

半透明の君は僕の手をしつかり握り。

そう言つた。

伝説は伝説じゃなかつたんだ。

昔の言い伝えつて全部本当は嘘かもしれないって心の何処かで思つてた。

でも救われたいから必死で塔を登つて來た。

救われたいから必死で出来得る限りのことをしたいと思つた。

その横に日本語で彫られた石碑が在つた。

「絶対日本人だつて私を造つた睡蓮は言つてたよ。」

半透明の君が力強くそう言つた。

「私は人間なんて滅びれば良いって思つたけど。」

「睡蓮があまりに必死で石碑を彫るから可哀想になつて。」

「未来のことなんて放つとけばいいのに。」

「優秀だつたんだよ。睡蓮。」

僕は石碑を解析始めた。

日本語でありがたかつた。

英語だつたらきっと僕の頭では理解できない。

過去からのメッセージ。

この塔を1人で造った同じ名前の女人の人からの伝言。

最後にこう在った。

「あなたならきっとやり直せる。」

古代日本語で色々と説明が書いてあつたけど。
要はメインコンピュータの左右にある赤いボタンを寸分違わず同時に押すって事だった。

その石碑によればこの太陽の塔はエネルギーを沢山蓄えていて。
そのエネルギーを解放する事によつて低気圧を強制的に造ることが出来るらしい。

でもそれは僕の命が終わることを意味していた。
巨大なエネルギーに耐えられるような鋼鉄の体は持つてないから。
ちっぽけな僕の命と引き換えに。

地球が助かればと願う。

たつた一度の人生でこんな経験できる奴なんて滅多にいない。
そう思おうとしたけど。
足が竦んだ。情けない。
勇者になつたんだと自惚れられたら良かつたのに。
僕の事なんかきっと誰も知らないで雨が降つたと喜ぶんだろう。
そう思うと怖かった。
生きてきた証をえ無くなりそうで。

「自分がこんなに怖気づく嫌な奴だとは思わなかつた。」

睡蓮がそう言つから。

「そんなもんでしょう？」

私はこう答えた。

あなたは純粹な心を持つてる。

だから私を見て私に触れられた。

古代日本人の睡蓮みたいな強い人はなかなか居ないよ。

あの人は怖氣づく事は皆無だつた。

どれだけ腹を括つてこの塔を造つたんだろ。

「人間の英知を集めたような古代日本人があなたに遺したメッセージを無駄にしないで。」

私はそう言つて赤いボタンの前へ立つた。

それは私の自爆ボタンでもあります

塔のエネルギーを解放するホダントがた

「怖いよ。」

僕は情けなくて。

赤いボタンの前になかなか立てなかつた。

一睡蓮

君が優しい声で

僕を呼ぶ。

「1、2、3で押すよ。」

押した途端。

僕は爆風で吹き飛んだ。

最後に見たのは君の姿。

半透明な君が僕へと手を差し延べる姿だった。

あなたの子は舞蓮つて名づけますよ。

睡蓮の花言葉は純粋。清純。信仰。

誰もが見えないものが見える人間になりますように。
その心で。

E
N
D

Epitome (後書き)

やつと最後です。

編集が変なことになつてしまい申し訳なかつたです。
良かつたら感想頂けると力になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170e/>

睡蓮

2010年10月28日07時54分発行